

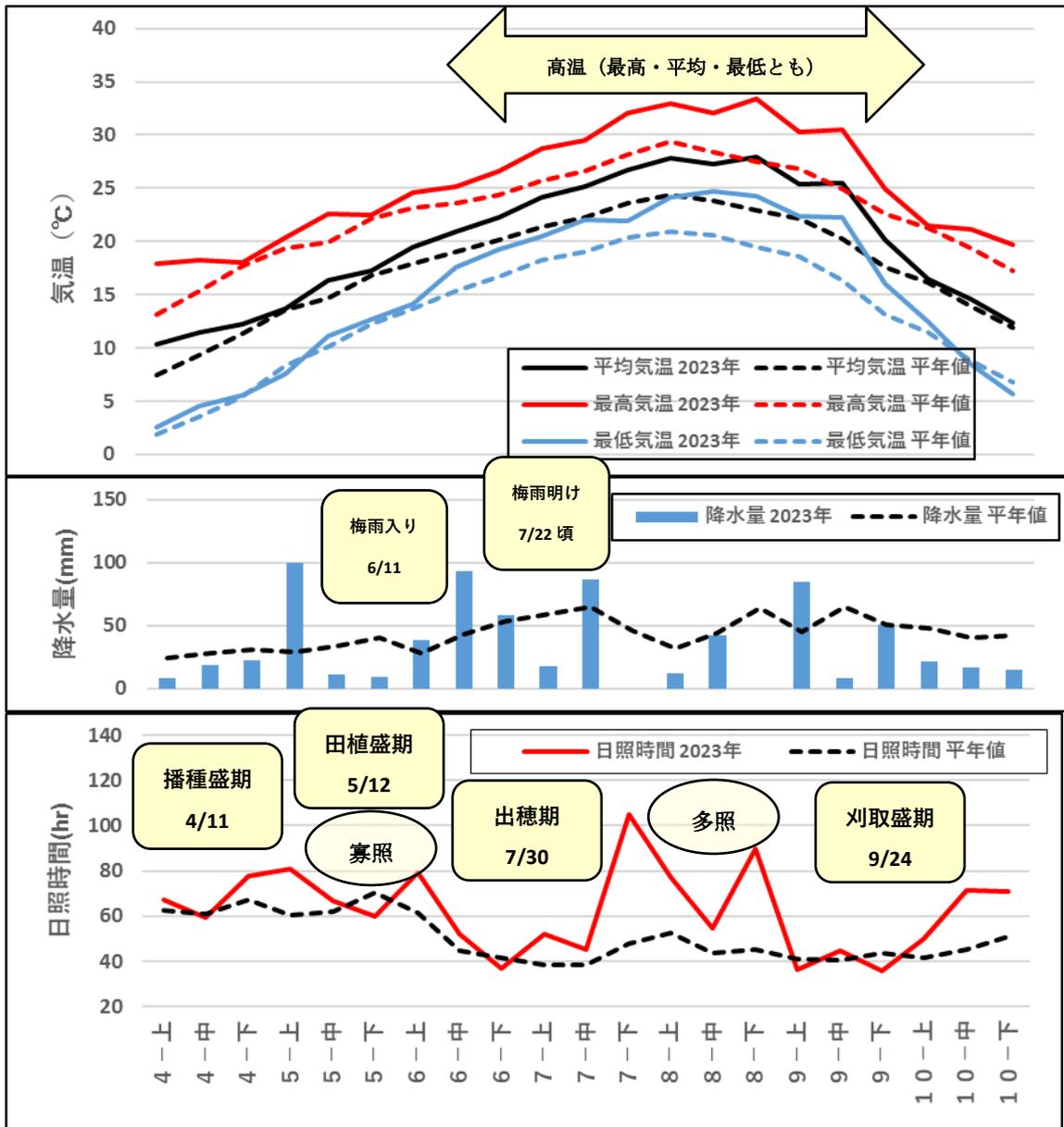
# 令和5年産米 稲作情報 総括号

令和6年2月29日



～令和5年産米の作柄は？ 令和6年はどんな米づくりを？～

## 1 令和5年稲作期間の気象経過（4月上旬～10月下旬）（古川アメダス）



## 2 播種・田植・出穂・刈取状況

- ・播種始期は平年並みの4月2日，**播種盛期は平年並みの4月11日**であった。終期は平年並みの4月21日であった。県では、近年の茎数過剰傾向や登熟期の高温障害回避を踏まえ、田植えを遅くする「晩期栽培」を推進しているが、概ね平年並みの播種時期となった。

- 田植始期は平年並みの5月4日、田植盛期は平年より1日遅い5月12日であった。終期は平年より1日遅い5月23日であった。

### 播種期(県全体)

### 田植状況(県全体)

区分	播種始期 (5%)	播種盛期 (50%)	播種終期 (95%)	区分	田植始期 (5%)	田植盛期 (50%)	田植終期 (95%)
本年	4月2日	4月11日	4月21日	本年	5月4日	5月12日	5月23日
前年	4月2日	4月11日	4月22日	前年	5月3日	5月10日	5月22日
平年	4月2日	4月11日	4月21日	平年	5月4日	5月11日	5月22日
平年差	並	並	並	平年差	並	1日遅い	1日遅い

- 梅雨明け以降の高温で生育ステージが早まり、出穂始期は平年より3日早い7月26日、出穂盛期は平年より3日早い7月30日であった。終期は平年より5日早い8月5日であった。
- 高温多照の影響で刈取は大幅に早まり、刈取始期は平年より3日早い9月16日、刈取盛期は6日早い9月24日であった。終期は平年より7日早い10月7日であった。

### 出穂状況(県全体)

### 刈取状況(県全体)

区分	出穂始期 (5%)	出穂期 (50%)	穂揃期 (95%)	区分	刈取始期 (5%)	刈取盛期 (50%)	刈取終期 (95%)
本年	7月26日	7月30日	8月5日	本年	9月16日	9月24日	10月7日
前年	7月29日	8月3日	8月12日	前年	9月18日	10月1日	10月15日
平年	7月29日	8月2日	8月10日	平年	9月19日	9月30日	10月14日
平年差	3日早い	3日早い	5日早い	平年差	3日早い	6日早い	7日早い

- ◆出穂後の積算平均気温による刈取適期の目安は、「ひとめぼれ」(940~1,100℃)の場合、下表のとおりであった。9月中旬まで高温が続いたこともあり、成熟期は大幅に早まり、丸森や仙台等では8月中に成熟期を迎えていたことになる。なお、出穂期(平坦地)は各地区の「平均出穂期」として計算したので、田植えが早かった場合や早生品種では、さらに早まったと考えられる。

アメダス地点	丸森	白石	亘理	仙台	大衡	古川	鹿島台	築館	米山	気仙沼	石巻	
出穂期(平坦地)	7月28日	7月28日	7月28日	7月28日	7月28日	7月29日	7月29日	7月30日	7月30日	8月1日	7月30日	
刈取適期	曜日	積算気温										
8月29日	火	887.8	884.4	871.5	919.1	884.2	859.2	864.4	826.6	842.5	753.3	836.0
8月30日	水	916.2	911.7	899.0	947.8	911.8	886.7	892.4	853.4	870.2	780.0	863.5
8月31日	木	944.8	939.9	926.5	976.9	939.9	915.0	920.6	881.6	898.5	807.4	891.3
9月1日	金	972.4	967.7	953.1	1,005.5	966.9	942.1	947.5	908.8	926.0	833.9	918.5
9月2日	土	999.3	994.6	979.9	1,033.8	993.2	968.5	974.4	935.2	953.2	860.1	945.6
9月3日	日	1,025.8	1,020.6	1,006.4	1,061.2	1,019.7	994.8	1,001.5	961.2	980.4	885.5	972.9
9月4日	月	1,051.2	1,045.4	1,032.1	1,087.2	1,045.1	1,020.3	1,027.5	986.5	1,006.4	910.7	999.1
9月5日	火	1,078.1	1,071.7	1,058.5	1,114.1	1,071.4	1,046.5	1,054.1	1,012.6	1,032.9	936.0	1,025.3
9月6日	水	1,101.9	1,094.8	1,082.2	1,138.1	1,094.8	1,070.0	1,077.8	1,036.2	1,056.8	959.2	1,048.5
9月7日	木	1,126.3	1,118.8	1,106.7	1,163.3	1,119.4	1,094.0	1,102.0	1,060.0	1,081.0	981.9	1,072.7
9月8日	金	1,149.0	1,140.8	1,130.1	1,187.1	1,142.0	1,116.7	1,125.3	1,082.8	1,104.6	1,003.6	1,096.5
9月9日	土	1,176.0	1,167.1	1,156.6	1,214.3	1,168.1	1,142.8	1,151.8	1,108.8	1,131.2	1,028.5	1,122.6
9月10日	日	1,202.9	1,193.5	1,183.2	1,241.9	1,194.2	1,169.4	1,178.8	1,135.1	1,158.2	1,053.6	1,149.6
9月11日	月	1,230.4	1,220.9	1,209.9	1,269.4	1,220.8	1,196.0	1,205.5	1,161.8	1,185.0	1,078.7	1,176.1
9月12日	火	1,256.5	1,247.3	1,235.5	1,296.6	1,247.3	1,222.4	1,232.5	1,188.8	1,212.1	1,104.5	1,202.8
9月13日	水	1,282.2	1,272.4	1,260.5	1,323.1	1,272.7	1,247.9	1,258.3	1,214.6	1,238.1	1,129.1	1,228.7
9月14日	木	1,308.1	1,298.0	1,286.1	1,350.2	1,298.5	1,273.8	1,283.8	1,240.1	1,264.1	1,154.0	1,254.8
9月15日	金	1,332.6	1,321.8	1,310.7	1,375.4	1,323.0	1,298.5	1,308.7	1,264.6	1,288.9	1,177.7	1,279.6
9月16日	土	1,357.2	1,345.7	1,334.6	1,400.3	1,346.6	1,322.4	1,332.7	1,287.9	1,312.8	1,200.8	1,303.7

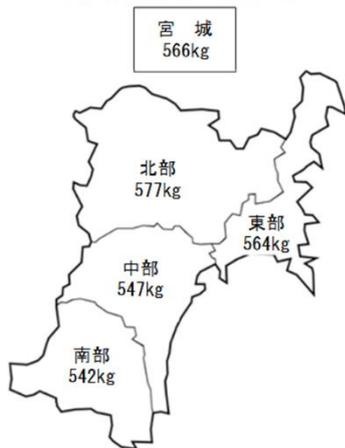
注1) 「ひとめぼれ」の刈取早限は940℃程度、刈取適期は1,000℃程度、刈取晚限は1,100℃程度である。

注2) 気温の積算値は、各アメダス地点の実測値を用いた。

### 3 作柄・収量・品質等

(1) 作柄 (令和5年12月12日 東北農政局発表)

図1 作柄表示地帯別10a当たり収量 (1.70mmのふるい目幅ベース)



- ・宮城県の10a当たり収量は566kgで、作況指数は105の「やや良」となった。
- ・各地域ごとの10a当たり収量は、左図のとおり。
- ◆東北地域の10a当たり収量は569kgで、作況指数は101の「平年並み」であった。各県の収量・作況指数は、以下のとおり。
- 青森県 614kg 102 「やや良」
- 岩手県 551kg 104 「やや良」
- 秋田県 552kg 97 「やや不良」
- 山形県 589kg 100 「平年並み」
- 福島県 561kg 102 「やや良」
- ◆なお、全国の10a当たり収量は533kgで、作況指数は101の「平年並み」であった。

(2) 県生育調査ほの収量調査結果 (令和5年度 水稻作柄解析資料より)

区分	品種	㎡穂数 (本/㎡)			1穂籾数 (粒/穂)			㎡籾数 (百粒)		
		本年値	前年比 (%)	平年比 (%)	本年値	前年比 (%)	平年比 (%)	本年値	前年比 (%)	平年比 (%)
生育調査ほ	ひとめぼれ n=26	429	98	96	69.3	101	103	295	99	99

区分	品種	登熟歩合 (%)			玄米千粒重 (g/千粒)			精玄米重 (kg/a)		
		本年値	前年比 (%)	平年比 (%)	本年値	前年比 (%)	平年比 (%)	本年値	前年比 (%)	平年比 (%)
生育調査ほ	ひとめぼれ n=26	84	108	103	22.5	98	101	55.7	106	103

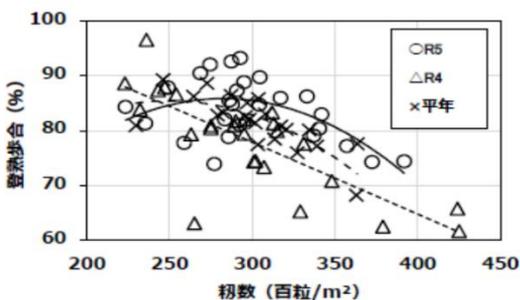


図2 籾数と登熟歩合 (「ひとめぼれ」)

注1) 生育調査ほ+作況試験ほ R5 (n=26), R4 (n=26), 平年 (n=22)  
 2) 実線はR5、破線はR4、点線は平年の近似曲線  
 3) 平年値は、過去5か年 (R4~H30) の平均

◆「県水稻生育調査ほ」26ほ場の平均値

- ・㎡穂数 → 平年をやや下回る
- ・1穂籾数 → 平年をやや上回る
- ・㎡籾数 → 平年並み
- ・登熟歩合 → 平年をやや上回る
- ・千粒重 → 平年並み

→ 精玄米重 → 平年をやや上回る

◆㎡籾数・千粒重は平年並みだったが 登熟後半まで多照だったため 登熟歩合が高く 精玄米重は平年をやや上回った

(3) 令和5年産米の検査結果 (宮城県JA農産物検査協議会資料, 県水稻作柄解析資料)

令和5年産米 検査実績 (令和5年12月末日現在)

区分	1等		2等		3等		規格外		総検査数量 (kg)
	検査数量 (kg)	比率 (%)	検査数量 (kg)	比率 (%)	検査数量 (kg)	比率 (%)	検査数量 (kg)	比率 (%)	
うるち米	118,237,650	82.8	22,568,640	15.8	1,595,640	1.1	469,918	0.3	142,871,848
もち米	98,910	2.9	2,746,380	79.2	623,130	18.0	0	0.0	3,468,420

- ・うるち米全体の検査数量は 142,871 t。1 等比率は 82.8%であった。
- ・もち米全体の検査数量は 3,468 t。1 等比率は 2.9%にとどまった。

令和5年産米 2等以下格付理由の比率（令和5年12月末現在）

区分	整粒不足	形質				被害粒				着色粒			異種穀粒
		充実度	心白・腹白	その他	計	発芽粒	胴割粒	その他	計	カメムシ	その他	計	
うるち米	0.0	4.5	6.0	1.0	11.5	0.2	0.2	0.0	0.4	3.1	1.8	4.9	0.1
もち米	0.0	90.2	0.0	0.1	90.2	2.0	2.4	0.2	4.6	1.5	0.3	1.8	0.5

※ラウンドの関係で、合計は一致しない場合がある。

- ・うるち米の落等理由；第1位は「形質」、第2位は「着色粒」、第3位は「被害粒」であった。形質では、心白・腹白粒によるものが最も多かった。着色粒では、カメムシ類による斑点米が一部地域で多い傾向にあった。また、一部の品種では刈遅れによる「その他着色粒（茶米）」もみられた。
- ・もち米の落等理由；第1位は「形質」、第2位は「被害粒」、第3位は「着色粒」であった。被害粒では、高温登熟・降雨・刈り遅れによる発芽粒，胴割粒，碎米の発生が多かった。

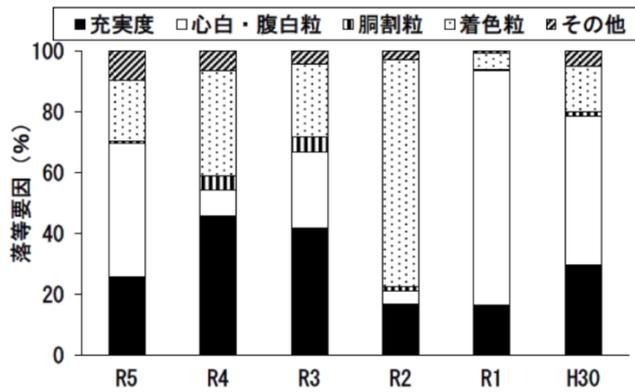


図24 2等以下の主な落等要因  
(宮城県 JA 農産物検査協議会：9月30日現在)

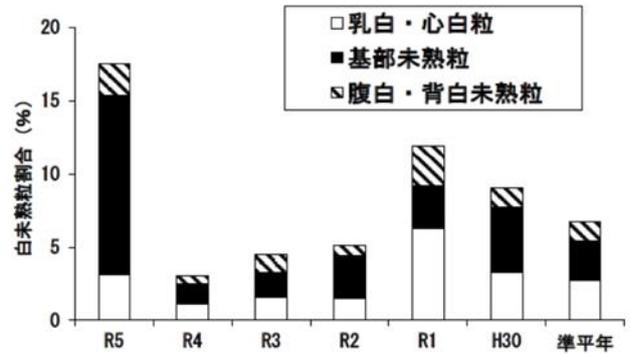
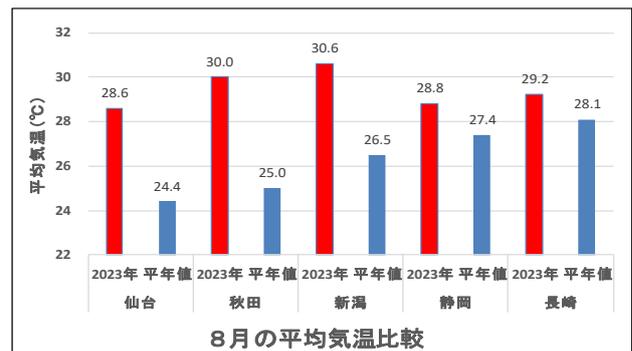
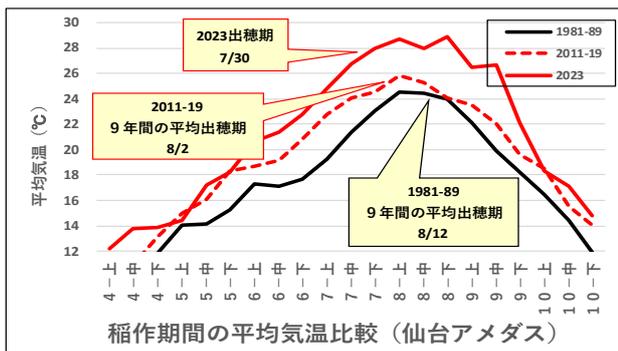


図25 白未熟粒の内訳  
(生育調査ほ+作況試験ほ5/10移植「ひとめぼれ」n=26)  
注1) 較粒判別器：R5～R3 サタケRGQ1100B、R2～H30 サタケRGQ110A  
2) 準平年：令和4～平成30年の平均値

- ・令和5年は、令和元年に次いで「形質（充実度+心白・腹白粒）」による落等が多かった。
- ・令和5年は「基部未熟粒」が最も多く、「乳白・心白粒」及び「腹白・背白未熟粒」は、令和元年に次いで多かった。

## 4 作柄の要因解析

(1) 令和5年の稲作期間は、どれだけ暑かったのか？（過去の年代との比較から）



- ・1980年代は、8月第2半旬の暑さのピークを過ぎてから出穂期（8/12）を迎えていたため、気温が低下していく中での登熟により、高品質の米が得られた。
- ・2010年代は、田植以後の高温傾向によって生育ステージが進み、出穂期（8/2）を過ぎて登熟が始まってから暑さのピークを迎えていたため、高温下での登熟となり、乳白粒や胴割粒等が発生しやすくなった。
- ・2023年は、7月から9月中旬までかなりの高温傾向が続き、生育ステージが大幅に進み、出穂期は平年より3日早い7月30日（以上、左図）で、「ひとめぼれ」等の中生品種は8月末から9月始めには成熟期に達した地域もあった（既出）。
- ・8月（東北・北陸地域では水稻の登熟期間）の平均気温は、西日本や東日本では平年より1～2℃高かった。
- ・北陸や東北では、平年より4～5℃も高く、新潟や秋田では30℃を超えた（以上、右図）。

(2) 各要因から推察した米の品質（白未熟粒の発生等）に関する年産米の特徴

年産等	1等比率 (%)	20日間平均気温 (°C)	20日間積算日照時間 (hr)	水稻全初数 (百粒/m <sup>2</sup> )	水稻減数裂期葉色(GM)	その他	概要
令和5年	82	28.6 高温	150 多照	285 適正	33.8 やや低い		著しい高温で 葉色値も低かったが 極多照であったため 転流の阻害は少なかった
令和4年	96	25.7 適温	84 やや少照	299 適正	36 適正		日照少なめだが 気温・初数・葉色値が適正に保たれていた
令和元年	71	26.5 やや高温	86 やや少照	304 やや多	37-38 やや高い		初数多く 高温で やや少照であったため 穂への転流が阻害され 乳白粒が発生
平成24年	87	26.0 やや高温	118.9 やや多照	291 適正	33.9 やや低い		登熟初期～中期の高温で 玄米が急激に肥大し 基白粒や背白粒が発生
平成22年	74	27.1 高温	125 多照	284 適正	32 低い	収穫期降雨	高温で 葉色値が低下したため 転流が阻害され 白未熟粒が発生 刈り遅れも発生
平年値・適正值	-	24.7	94	280-300	35-37		

※気象データは 仙台アメダスのデータである

- ・「白未熟粒」の発生は、出穂後の平均気温が高いと発生が多くなるが、日照時間の多少、水稻の初数（生育量）や葉色値（栄養状態）等も大きく関係していると推察される。

(3) 県作柄解析資料からわかったこと

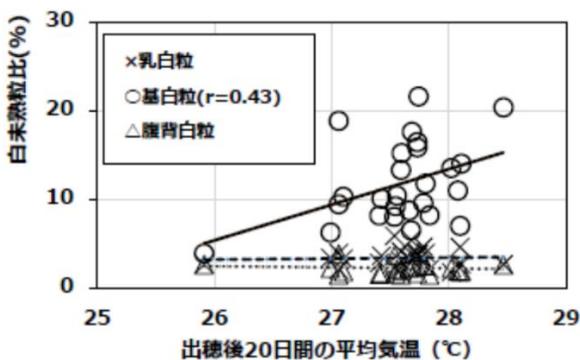


図3 出穂後20日間平均気温と白未熟粒（「ひとめぼれ」）

注1) 生育調査ほ+作況試験ほ R5(n=26), R4(n=26), 平年(n=22)

2) 破線は乳白粒, 実線は基白粒, 点線は腹背白粒の近似曲線

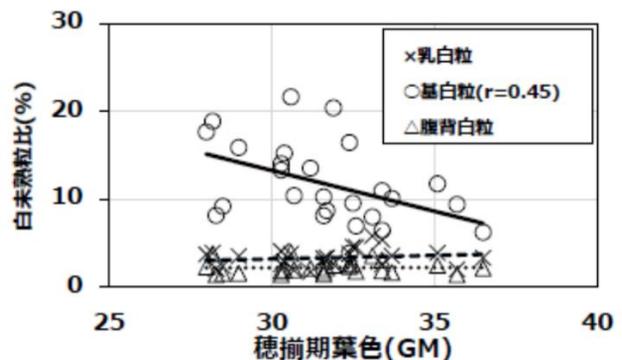


図4 穂揃期葉色(GM)と白未熟粒「ひとめぼれ」

注1) 生育調査ほ+作況試験ほ R5(n=26), R4(n=26), 平年(n=22)

2) 破線は乳白粒, 実線は基白粒, 点線は腹背白粒の近似曲線

- ・出穂後20日間の平均気温が高いほど、白未熟粒（基白粒）の発生が多い傾向にあった。
- ・穂揃期の葉色が低いほど、基白粒の発生が多い傾向にあった。

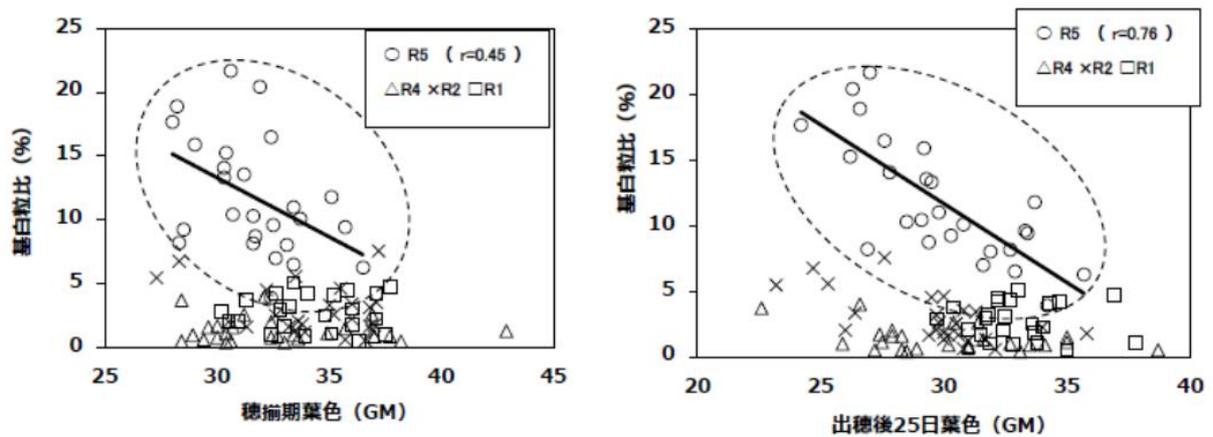


図2 年次別穂揃期葉色（左）及び出穂後25日葉色（右）と基白粒の関係（「ひとめぼれ」）

- 注1) 丸で囲んだ箇所は、R5のプロットを示す。  
 2) 近似曲線及び、R5のものを示す。  
 3) 「ひとめぼれ」は、図1と同じ。

- 穂揃期や出穂後25日の葉色が高いほど、基白粒の発生が少ない傾向にあった。

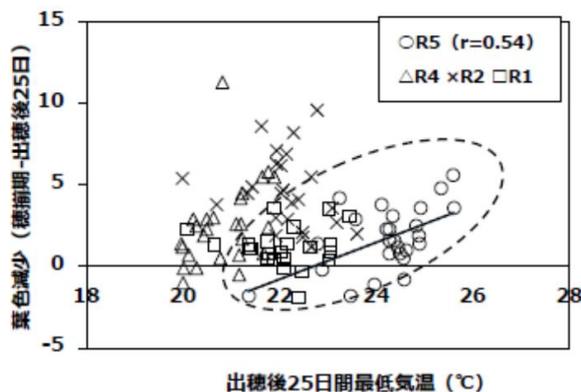


図3 年次別出穂後20日間の最低気温と葉色減少（穂揃期-出穂後25日）（「ひとめぼれ」）

- 注1) 丸で囲んだ箇所は、令和5年度のプロットを示す。  
 2) 近似曲線は、R5のものを示す。  
 3) 「ひとめぼれ」は、図1と同じ。

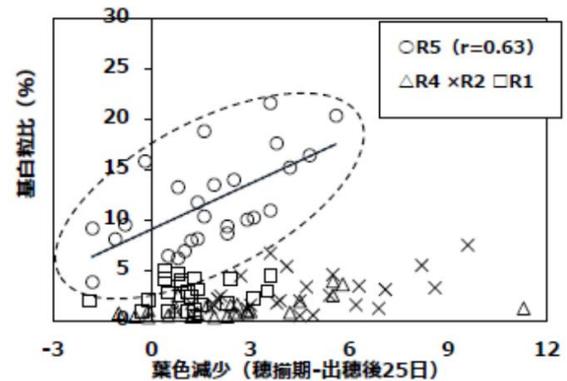


図4 年次別葉色減少（穂揃期-出穂後25日）と基白粒の関係（「ひとめぼれ」）

- 注1) 丸で囲んだ箇所は、令和5年度のプロットを示す。  
 2) 近似曲線は、R5のものを示す。  
 3) 「ひとめぼれ」は、図1と同じ。

- 出穂後25日間の最低気温が高いほど葉色の減少が大きく、稲が消耗したと考えられる。
- 葉色の減少が小さい（葉色が維持された）ほど、基白粒の発生が少ない傾向にあった。

#### (4) まとめ

- 作況指数は105の「やや良」で平年より多収となった。収数が確保され、登熟が良好だったためと考えられる。
- 出穂後の高温によって稲体が消耗（葉色が低下）したことで、白未熟粒（特に基白粒）の発生が多くなり、品質低下につながった。
- 出穂期が早く、登熟も早まったために、刈り遅れによる着色粒，発芽粒，胴割粒の発生がみられた。
- 出穂後半まで葉色が維持されるほど、基白粒の発生が少ない傾向にあった。

## 5 令和6年産に向けて（令和5年度 第2回 良質米づくり研修会資料 ほか）

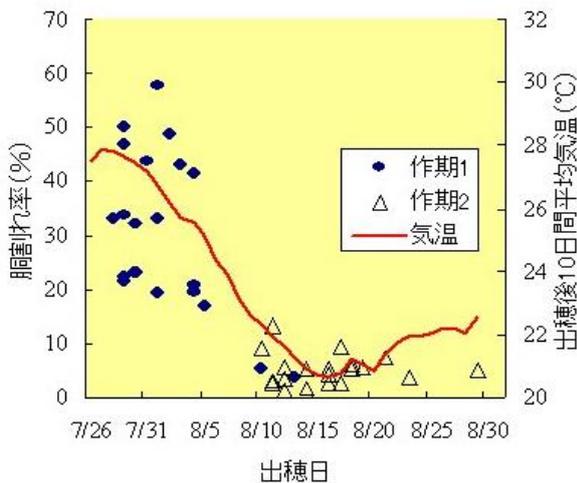


- (1) 登熟期の高温とその影響
- ・登熟期にイネが高温や日照不足などの不良環境条件にあたると、玄米が白濁して白未熟粒が発生する。白く濁って見えるのは、胚乳細胞に蓄積したデンプン粒どうしの間でできた空隙で光が乱反射するためである。
  - ・登熟（デンプンの蓄積）は、①胚乳中心部、②その周辺部、③腹側、④背側、⑤最後に基部、の順に進む【以上、出展元「イネの高温障害と対策」森田敏】。

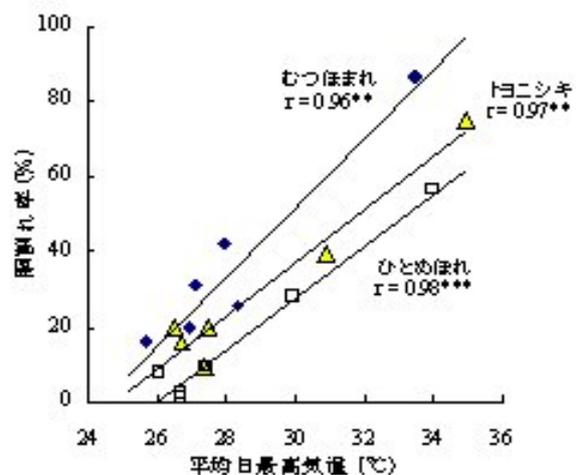
【写真 整粒と高温や日照不足で発生する白未熟粒玄米の外観（上）と横断面（下）】

（提供：農研機構 中野洋）

- ・したがって、登熟初中期に高温等の問題があると乳白粒や腹白粒・背白粒が発生しやすく、登熟後期まで高温だと基部未熟粒（基白粒）が発生しやすくなる。
- ◆白未熟粒は、出穂後20日間の平均気温が26～27℃以上になると、増える傾向がある。
- ・籾数が多すぎたり穂揃期以降の葉色が低下すると、白未熟粒の発生リスクが高まる（既出）。



【出穂期と登熟気温及び胴割れ発生との関係】



【出穂後10日間の平均日最高気温と胴割れ率との関係】

- ・刈り取りが遅れて米粒の含水率が大きく低下した状態で降雨にあたり、収穫後の乾燥調製の際に、籾を急速に乾燥させ過ぎたりすると「胴割れ」が増えやすくなる。
- ・胴割れ粒は、出穂後10日間の気温、特に最高気温が高いほど、発生しやすくなる。
- ・胴割れには品種間差があり、「ひとめぼれ」より「トヨニシキ」や「ササニシキ」などのニシキ系品種の方が、高い傾向がある【以上、出展元 農研機構；東北農業研究センター】。

## (2) 高温障害のリスク低減技術

### イ 適切な土壌管理で地力を高める

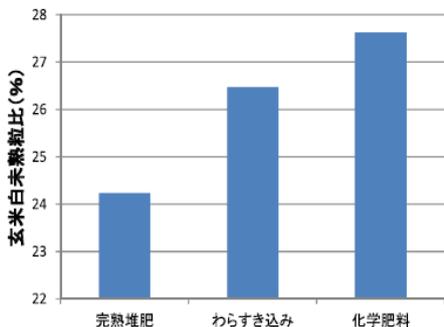


図3 有機物の連用施用と玄米白未熟粒比の関係  
注1) H22年(高温年)のデータ。  
注2) 古試「ひとめぼれ」有機物を9年連用のほ場。

- ・堆肥や稲わら等の有機物を施用し、地力を高めることによって登熟期間の稲体の活力が維持され、品質低下の防止につながる(左図)。
- ・ただし、投入量が過剰になると、籾数が増えすぎて乳白粒が増える恐れがあるので、地力に応じた投入量とする。
- ・作付け直前に稲わらや未熟堆肥を施用すると、イネの窒素不足や水田土壌からのガスの発生要因となるので注意が必要である。

### ロ 適正な籾数の確保(籾数過多の防止)

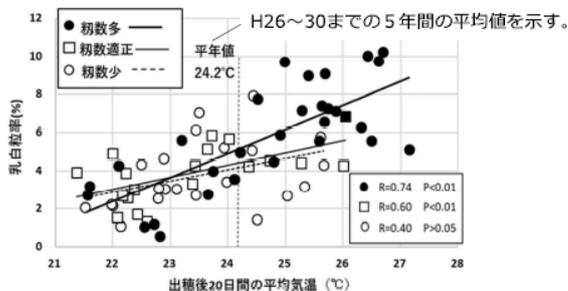


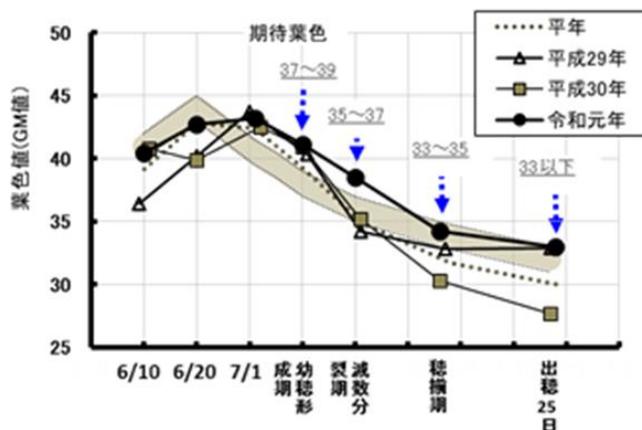
図5 籾数別の「ひとめぼれ」における出穂後20日間の平均気温と乳白粒の関係  
注1) 出展：宮城県「普及に移す技術」第96号  
注2) 「籾数少」～271百粒、「籾数適正」278～301百粒、「籾数多」302百粒/m<sup>2</sup>とした。

- ・出穂後の気温が高い場合には、m<sup>2</sup>当たり籾数の影響を強く受け、乳白粒率が高まる傾向がある(左図)(子供の数が多いと食料不足から栄養失調を起こしやすい?)。
- ・田植日が早かった場合、初期生育が旺盛になりやすく、籾数が過剰になることがある

(籾数のコントロールが難しくなる) → 田植日を5月15日以降にする(晩期栽培)。

- ・適切な基肥、追肥管理により、「ひとめぼれ」の場合はm<sup>2</sup>当たり籾数を280～300百粒になるようにコントロールする。

### ハ 適切な肥培管理で登熟後半の葉色を維持する



- ・穂揃期や出穂後25日の葉色が高いほど、基粒は少ない傾向にあった(既出)。
- ・近年は、6月～7月の気温が高く、肥料からの窒素成分の溶出が早まり、穂揃期以降の葉色が低下しやすい傾向にある(左図)。

※一発肥料は、平年並みの気温で推移した場合に理想的な窒素溶出が行われるように作られているため、高温年では早めにチッソが溶出して、生育後半に葉色が

低下することがある。 → 一発肥料でも、葉色が期待値以下に低下する恐れがある場合は、追肥が必要(流し込み施肥などで対応)である。

- ・葉色が維持されていた水田では、堆肥の施用や減数分裂期の追肥が行われていた。

ニ 晩期栽培・直播栽培で出穂期を遅くし、早期出穂による高温のリスクを軽減する

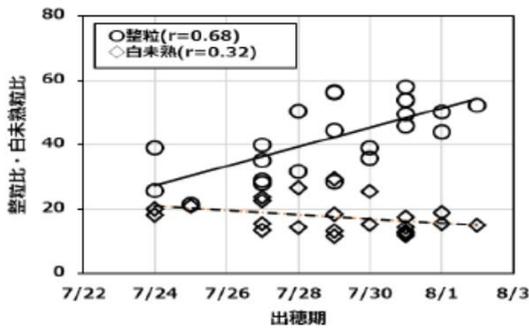


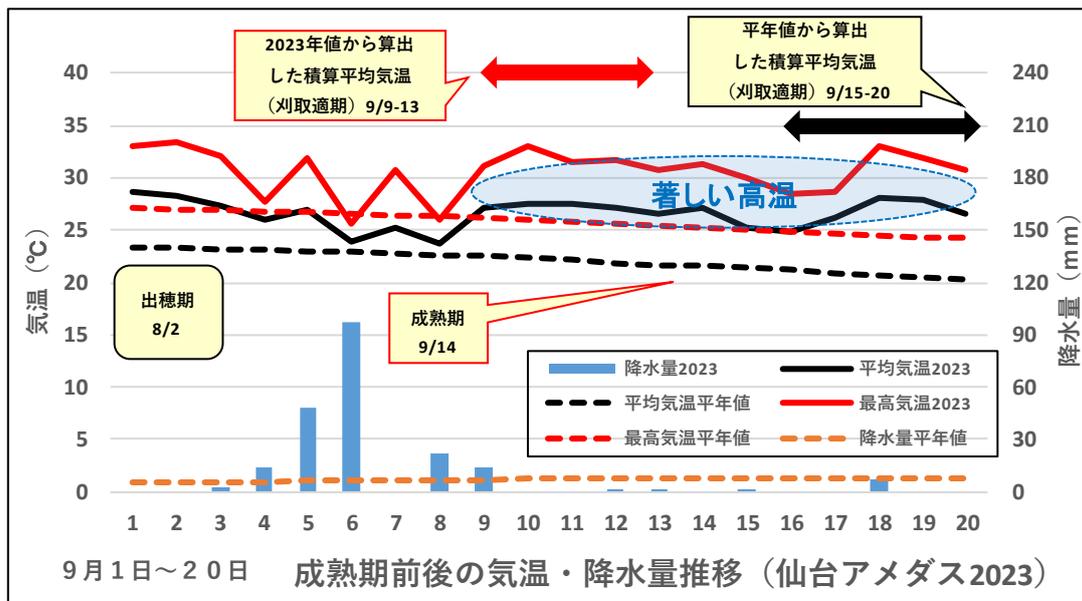
図19 出穂期と整粒及び白未熟粒（「ひとめぼれ」）

注1)生育調査ほ+作況試験ほ (n=26)

2)実線は整粒比、破線は白未熟粒比の近似曲線

- ・出穂期が遅くなるほど、白未熟粒の比率は低下する（左図）。
- ・出穂期を遅らせる（＝田植えを遅くする）ことで、高温登熟による基白粒や腹白粒，乳白粒などの発生軽減が期待できる。
- 田植えを5月15日～25日に行う「晩期栽培」や「直播栽培」が有効である。
- ・「つや姫」など、晩生品種の導入も、出穂期が遅くなるので、同様の効果が期待できる。
- ・「ササニシキ」や「みやこがねもち」は、収穫時期と秋雨前線が重なると「穂発芽」の発生リスクが高まる品種なので、晩期栽培を推奨する。

(3) 巨大胚芽米「金のいぶき」について



- ◆ 5年産の金のいぶきは、成熟期前後の降雨と高温によって穂発芽が発生し、品質を落とした。
- ・「普及展示ほ」の出穂期は、平年より5日早い8月2日で、成熟期は平年より12日も早い9月14日であった（上図）。
- ・出穂後の積算平均気温から予測した刈取適期（1,050～1,150℃）では、出穂後に「平年並み」の気温で推移した場合は9/15～20日であったが、今年の実測値では9/9～13日で平年より6～7日も早かった。
- ・成熟期に達する直前にまとまった降雨があり、その後も断続的な降雨とともに、平年を大きく上回る高温（9/9～20日の平均気温は26.8℃で、平年値より5.4℃も高かった）が続いた。
- ▲金のいぶきには、①巨大胚のため胚芽自体の水分が下がりにくい、②胚芽と胚乳の接合部分の面積が大きく水分吸収が早くて多い、③低アミロース性が水分の吸収と保持を助長しやすい、等の品種特性がある。
- 成熟期に達したら、早急に収穫し、品質の低下を防ぐことが重要である。

(4) 高温登熟した「種子」の催芽上の留意点

◆**水稻の種子は、出穂後の高温によって種子の休眠が深まるとの報告がある。令和5年産の種子は、例年より休眠が深い可能性があり、水稻育苗時に「出芽不揃い」等が発生するおそれがある。** → 対策は、以下のとおり。

- ・塩水選を行い、種子消毒は必ず実施する。
- ・浸種期間は酸素不足にならないように、2～3日おきに水の交換を行う。
- ・催芽時は、必ずハト胸状態になっているか確認してから、播種を行う（特に、「**萌えみのり**」や「**ひとめぼれ**」など、穂発芽性が「難」の品種は出芽が不揃いになることがあるので、催芽時の温度や時間に注意し、芽の切れ具合を確認すること）。

## 6 その他

◆**大型のカメムシ「クモヘリカメムシ」が生息域を拡大中。**

令和5年度 発生予察情報	<b>防除情報第7号</b>	令和5年8月10日発行 宮城県病害虫防除所
-----------------	----------------	--------------------------

**県南地域の本田でクモヘリカメムシが多く確認されています！**  
**また、残草している本田ではカスマカメムシ類幼虫も多く確認されています！**  
**水稻の生育に合わせ、適期防除を徹底しましょう！**

### 1 作物名 水稻

### 2 発生現況

- (1)8月上旬の本田における調査の結果、県南地域でクモヘリカメムシのすくい取り虫数が平年より多く確認された(図1)。
- (2)また、イヌホタルイが残草している地点では、県内全域でカスマカメムシ類幼虫が多く確認された。

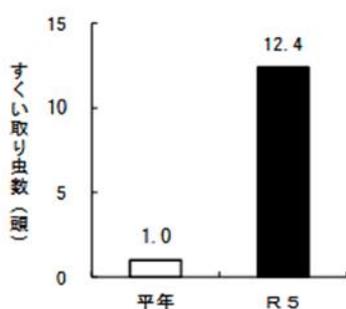


図1 本田におけるクモヘリカメムシのすくい取り虫数(県南地域、8月上旬)



写真1 クモヘリカメムシ

- ・クモヘリカメムシとは；体長15～17mm。宮城県では主に県南部に分布するが、令和2年に県北東部でも確認された。**近年の高温傾向により沿岸部を中心に生息範囲が広がっている模様。大型のカメムシで籾殻の上からでも吸汁することがある。**
- ・疑わしいカメムシを発見したら、JAの営農指導員や県農業改良普及センター・病害虫防除所にご一報をお願いしたい。